

とく  
徳

ほう  
朋

むりょうじゆ むりょうこう  
無量寿・無量光の世界

雲井 一久



くもい かずひさ  
1970—現在  
神奈川県生まれ。真宗大  
谷派真照寺。産業カウ  
ンセラー

欲望や価値付けだけが、いのちの意味なのでしょうか。それらが、真の満足をひらいてゆくのでしょうか。価値付けだけで、本当に生きていくことができますか。そして本当に生きたと言えますか。南無阿弥陀仏は、私たちに問いかけておられます。

お釈迦さまがおっしゃいました。老を嫌って、若さを誇っているけれども、若さとは老に向かう事である。若さに執着するだけで、老を避けたいという思いが起こって苦悩するのだ。若さを追うことは、実は老を追うことと同じなのだ。

生と死、若さと老い、健康と病気は、一本の棒のようなもので分けることなど本当はできない。死があるから生があり、老があるから若さがあり、病気があるから健康がある。これは切っても切れないものなのに、愚者はこれらを別に別に分けてみる。そして、片方に執着して苦しむのであると、お釈迦さまはおっしゃるのです。

このお言葉をいただくと、「一生価値付けだけで生きてゆけますか」と、お釈迦さまに問われてくるのです。老が駄目、病が駄目と切っていくとします。しかし、自分が寝たきりになったらどうしますか。そこには意味を見出せないのでしょうか。体が動かなくなったら駄目なのでしょうか。病気は駄目なのでしょうか。役に立つとか立たないとか、いのちはそういう価値付けだけで、きっぱり分けられるのでしょうか。

本当は、誰もが価値付けできないいのちの意味が欲しいのだと思うのです。<sup>はか</sup>量られたくないのです。<sup>はか</sup>量ることのないいのちを生きたいと要求しているのです。これを「宗教心」というのだと思います。

日常心にかき消され、この宗教心はずっと、私たちの奥に眠っているのです。人間は生まれた時からずっと、自分の本当の意味を問うてきているのです。

それを親鸞聖人は、誰もが、<sup>むりようじゅ</sup>無量寿を生きたいと願っておるのだとおっしゃっているのです。その<sup>むりようじゅ</sup>無量寿をわが身に明かしていくことが、本当の「終活」ではないでしょうか。

いくら終活で自分の外側を固めたとしても、残る問題があるのです。その残る問題は、生きる意味を求めるといことです。この生きる意味は、欲望の中では、価値付けに陥っていくのです。ですから「終活」が単に身辺整理に終わることなく、「<sup>しゅうかつ</sup>宗活」である方向が、大事であると思うのです。「<sup>しゅうかつ</sup>宗活」とは本当のよりどころを求め、見出すことです。そしてその本当のよりどころを見出すことは、本当の自分を見出すことに繋がります。(中略)

「<sup>むりようじゅ</sup>無量寿・<sup>むりようこう</sup>無量光」に頭が下がって、<sup>ふんべつ</sup>分別を超えた、このままで充分だ、自分が自分で良かった、有り難かったと自分自身を喜べる世界もあるのです。ですから、光と申しましたが、この人生が光り輝くような、宗を見出していく活動（<sup>しゅうかつ</sup>宗活）が現代においてとても重要な意味を持っていると思うのです。

（『<sup>しゅうかつ</sup>終活と<sup>しゅうかつ</sup>宗活』）

宗（むね）・・・よりどころとするもの。<sup>しゅうかつ</sup>宗活とは本当のよりどころを見つけていく事。

この「<sup>とくほう</sup>徳朋」は仏教を<sup>よ</sup>拠り所としている方々の言葉に直に<sup>じか</sup>触れ、この身で感じる事を願いとして毎月作成しています。多少難しい表現もあるかと思いますが、気にせず読んでみて下さい。

